

熊本県菊池郡七城村におけるカラー栽培の発展段階について

幾竹正実・賀江 定・池上一男

(熊本県農業試験場 熊本県農業改良課)

IKUTAKE, M., KANIE, S. and IREGAMI, K.

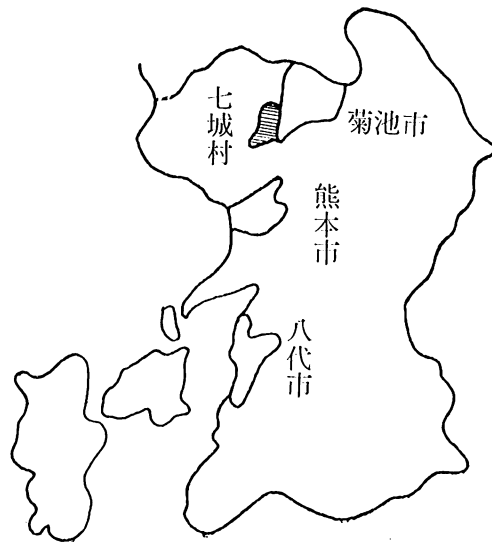
Calla Production in Shichijo District, Kumamoto Prefecture,
and the Prospect of Future Problems

I 七城村の立地条件

菊池郡七城村は熊本県の北部に位し、阿蘇外輪山につらなる地域で菊池市に隣接している。菊池市は最近泉都として開発され、また近くには菊池水源があり避暑地として有名である。この地域は熊本市近郊の古いカラー栽培地と同様の湧水地帯で、水温 $17^{\circ}\text{C}\sim 20^{\circ}\text{C}$ 位の湧水が豊富に得られカラー栽培の適地である。

II 菊池郡七城村におけるカラー導入の動機

菊池郡七城村前川部落は水田13.65ha畑12.0ha計25.6ha 農家戸数27戸平均耕地面積は95 a の零細経営で、主要作目としては米麦、養蚕、ハツカ、茶などでその経営ははなはだ雑多である。昭和32年菊池川改修の敷地として水田 3.15ha を収用されたため水田は縮少され経営は益々零細化した。しかも残された水田の大半は湧水の湿田で裏作は不可能な一毛作田で生産力は低く、このままでは将来とも希望は持てない状態であつ



た。このような状態を打開するため普及所に相談したところ普及所は県とも話しあいを行ないカラー栽培をすすめることにした。前川部落の現組合長原茂義氏は熊本市田迎町のカラー栽培の状況を視察し、部落の進むべき方向としてカラー栽培の確立を決心し、最初に2名の同志を得て県ならびに普及所の指導のもとに昭和34年にカラーの試作に着手した。

Ⅲ 七城村前川部落におけるカラー栽培の発展過程

前川部落におけるカラー栽培の発展過程は第1表の通りである。昭和34年においては栽培者3名で1.2aを栽培し、主として村内に販売された。35年には栽培者は5名で7aを栽培し、主として熊本市に出荷されたが旧産地の熊本市田迎町の生産者のあとで競売されるというありきまであつたため、販売には大変な苦勞を重ねた。そこで熊本市内の生産者とは別個の市場を開拓するために新たな決意のもので36年には栽培者10名54aに拡大し、九州以遠の地方に販売し各人の手取額は合計111万3千円に達した。その後確実に発達し、39年には28名で187aを栽培して38市場に出荷し、570万2千円の手取り金額に達している。昭和38年における主な仕向先と金額は第2表の通りである。

以上にみられるように販売先は名古屋、岐阜、大阪、京都等の中京並びに京阪地方、富山、福井、石川などの北陸地方、広島、岡山などの中国地方ならびに九州地方に販売されている。

カラー栽培は当初3名で始めたが、その後カラー栽培の有利なことがわかつて生産者が増加してきた。栽培面積は必ず市場の意向を打診し、販売先を確認して

第1表 前川部落におけるカラー生産の発展経過

年次	栽培者数	面積	市場数	金額
年	名	a		千円
34	3	1.2	村内	
35	5	7.0	内外	172
36	10	54.0	県	1,113
37	11	70.0	12	1,485
38	27	120.0	28	3,720
39	28	187.0	38	5,702
40	30	220.0	—	

第3表 個人別カラー出荷販売高 (昭和37年)

氏名	出荷総本数	総金額	出荷経費	手取金額	栽培面積	直接生産費	差引金額	10a当労働日数	10a当労働報酬
	本	円	円	円	a				
原成義	39,681	335,833	81,925	253,908	10	56,000	197,900	142	1,393
中村祐幸	29,294	252,664	59,315	194,349	10	56,000	135,034	142	950

第4表 農家経済の実績

氏名	年次	作物収入	畜産収入	特作収入	養蚕収入	カラー収入	計	カラーの全収入に対する割合
		千円	千円	千円	千円	千円	千円	%
原成義	37	327	50	66	250	253	946	26.7
	38	453	100	140	250	500	1,443	34.7
中村祐幸	37	187	50	90	—	194	521	37.0
	38	195	76	110	—	260	641	40.0

第2表 前川産カラーの仕向地と金額 (昭和38年)

仕向先	金額	仕向先	金額
	千円		千円
石川	471	和歌山	119
富山	334	兵庫	398
福井	267	岡山	297
岐阜	246	山形	172
長野	395	福岡	131
岐阜	1,293	長崎	86
京都	24	鹿児島	15
大阪	669		

増大を図ってきた。

昭和38年には栽培者は28名に達したので、生産者の組合を組織し品質改善、生産費の切下げ、市場の開拓、輸送包装の改善などを研究課題とし、栽培技術の研究、共同集荷共同選別による品質改善、ビニールハウス資材の共同購入による生産費の引下げを行なうとともに竹籠、銘柄の設定、包装状況の改善などにつとめた。最も意を用いたのは販路の開拓で生産者自ら北陸、京阪、中国地方まで市場視察に出かけ市場と連絡をとりながら栽培面積の拡大をはかってきた。

Ⅳ カラー栽培の経営に及ぼした影響

カラーを栽培した際における10a当りの手取り金を見ると、原成義氏は手取り25万3千円をあげ1日当り労働報酬は1,393円となっている。中村祐幸氏は同じく10a当り19万4千円をあげ1日当り労働報酬は、950円となっている。カラーによる収入と年間総収入に対する割合を、原成義氏ならびに中村祐幸氏についてみると、原氏の場合37年度年間収入94万6千円に対し、カラー収入は25万3千円で26.7%、38年度は144万3千円に対してカラーの収入は50万円で34.7%を占めている。中村氏の場合37年度年間総収入52万1千円に対してカラーの収入は19万4千円で37%、38年度では64万1千円に対してカラーの収入は26万円で40%を占めている。いかにこの地域におけるカラーの収入が農家の全収入に対して占める割合が大きいかかわかる。

Ⅴ 栽培法

1. 栽培の適地

カラー栽培は地下水の湧き出る湿地地帯という特殊な立地条件を利用した栽培である。流水または湧水地点の水温が15°C~22°Cで年間の水温の変化の少ない場所がよい。土質は埴壤土又は壤土、砂壤土のいずれの地質にもよいが、耕土が深いと採花および株の整理が行ないにくくなる。現在熊本県下には熊本市近郊に古い産地がある。田迎町、御幸町、画図町に、250 aの栽培がある。

2. カラーの性状並びに品種

南アフリカ原産の強壯な多年生草本で、弘化年間我國にオランダ人によつてもたらされたという。別名「おらんだかいう」といい切花用として栽培されている。葉は一株に集つて生じ粗大で太く長い葉柄をもち、三角形卵形で長さ20cm内外、先は短く尖り基部は耳状心臟形である。夏に葉の間に長さ1m位の茎を出し、頂上に花を開き芳香がある。仏焰包は白色で大きく長さ10cmをこえるが、漏斗状に巻いてその中央に短い棒状の肉穂花序が直立する。球根の形は一見ワサビの根茎に似て径3cm位、長さ15cm~21cm位である。促成栽培に使用する場合是一株に20球から30球位附着しているから、各株を1株づつ分け、大球だけを選別して茎葉を地上15cm位に切捨てて植込む。中小球は繁殖用にする。

3. 畦の作り方

1棟につき非戸1~2木をついてこの湧水を畦に引き、畦は高くし中央に60cmの通路を取るので120cmの畦が通路の両側にできる。この畦は常に噴出する湧水によつて潤つているようにする。

4. 植付け

植付け時期は5月上旬が適期である。120cm畦に1球づつ三角形に植込み、これを1株とする。横4株とし180cmに4列植とすると16株の48球植となり、片側に160株、1棟に320株の960球植となる。

5. 植付け後の管理

植付け後は湧水が常に流れて停滞しないように注意する。そのまま10月下旬まで放置しておけばよい。10月下旬~11月上旬にビニール被覆し、この時期に生育の状態をみて磷酸、加里肥料を少量施用する。日中は換気に注意し、ハウス内の温度をできるだけ25°Cに保つようにする。10月下旬から採花をはじめ、4月上旬迄切花できる。定植1年目に1株に10~15本採花出来る。植込後2~3年のものが質もよく生産量も多い。4年以降になると株が大きくなり密植となるので株分けして新しく植え替える。植え替えない場合は2年目頃から間引を行なう。切花の収穫は花が充分開く少し前に行なう。その方法は花梗を持つて軽く引きぬく。

VI 栽培技術並びに販売上の問題点

現状と将来（旧産地との比較）

熊本市には旧産地の田迎町に35戸2.2ha程度の産地があるが、これは自然発生的に発達してきた産地である。販売は個人出荷によつて近郊市場を対象としているので問題が少ない。前川地区は生産者の組織的活動によつて発達したもので輸送花きとして今後の発展が期待される。前川地区の将来の計画は第5表のとおりである。

第5表 前川地区カラー生産年次別計画

年次	41	42	43	44	45
面積 (ha)	2.5	3.0	3.5	4.0	5.0

前川部落と岩瀬部落との総農家戸数は47戸で、各農家1.5haの栽培を行なうように計画している。計画をたてるについての問題は組合活動のできる範囲内であるという意向で組合員は47戸が限度で各戸の経営を充実する方向ですすむ方針である。現在作柄の良否は主としてつき非戸の水温に左右されている状態である。水温の19°Cのところと、22°C~23°Cのところでは生育状態が異つている。水溫別の生育状態をみると19°Cのところは生育がよく、22°C以上になると草丈も弱くなるし、花立も悪くなる。カラー栽培が水溫に左右されるので水溫の高いところには将来花菖蒲を入れる計画である。適切な肥培管理の方法についてはあまり検討されていない現状である。流通面については販売に問題が多く特に小口の輸送が多く、輸送経費に多額を要していることが問題である。昭和39年度における出荷に要した経費は第6表のとおりである。すなわち総売上げの約20%は出荷経費に占められていることに注目すべきである。この点の解決のため経済連に県内各地の産地をまとめさせる話もあるが実務が伴わないので実現していない。

第6表 昭和39年度売上額と経費の割合

項目	金額	比率
総売上高	7112千円	100.0%
諸経費		
鉄道運賃	829	11.7
トラック代	134	1.9
ダンボール代	296	4.2
その他	149	2.0
計	1,409	19.8
手取額	5,702	80.2

附記

七城村のカラー栽培の今日あるは菊池農業改良普及所の指導に負うところが大きい。特に導入当時の平田技師、発展段階の岡部技師の努力は大きいものがある。またこの報告書の取まとめには池田技師の援助をうけたことを感謝する。